生徒作品例Ⅰ

川上弘美の『神様』に出てくる「くま」について考えてみたい。

この「くま」は、いったい何者なのだろう。真っ先に思い浮かぶのは、日本各地で人里に下りてきて問題になっているクマ。その仲間の一人（一頭）であると考えることには、あまり無理がないように思う。ただ、クマの仲間ではなく、別のもの、例えば、人間に浸食されている自然とか野生の象徴だということも、もちろん可能な気がする。森の精みたいな。

あるいは、捕った魚を器用にナイフで開き、粗塩を振って干物をつくったりする様子は、「くま」と呼ばれる人間なのかもしれないとも思われる。ひょっとすると異形のもの、人であって人とは見なされない何者か…。「美女と野獣」のビーストのような者かもしれない。

ただ、私は、現実には存在し得ないものが、最近３０５号室に引っ越してきた、ということで良いのではないだろうかと考える。それ以上でもそれ以下でもないというか。「くま」は自らを「くま」だと認めている（「貴方」と呼んで欲しいとは言うが…）し、川原で出会った三人も「くま」として接していたし、そもそも語り手が「くま」と呼んでいるではないか。

こんな風に、丸ごと受け容れてこそ、「悪くない一日だった」が心に響く気がする。

生徒作品例２

『神様』は短い作品だし、心理描写もあまり無いので、書かれていることをそのままストレートに受け入れるのがよいのかなと感じている。それよりも、私は「熊の神」が気になっている。「くま」ではなく「熊」。その「神様」っていったい何なのだろう。

授業では、「神様２０ーー」（２０ーー）という作品が発表されたことを知った。教科書で読んで好きになった「神様」の読み直しを迫られているような気がして、私自身は少し嫌な気持ちになった。理由は、さまざまな「意味」とか「教訓」とか「思想」といったものが、「くま」に、いや、元の作品全体に、上塗りされてしまったような気がしたからだ。

ただ、「神様２０ーー」を書いたのも、ほかならぬ川上弘美さん自身なのだから、これは、一読者である私があれこれ言っても詮無いことなのかもしれない。

震災や原発事故といった不幸なできごと、こうした外的な要因から、「神様」という作品が「変質」してしまったことの是非について、私はなんと言って良いのか分からない。作者自身にも、どうにもしようがない衝動があったのだろうと思うし、もしかしたら、世界は、どうしようもなく変わってしまった、あるいは変わりつつあるということなのだろうか。

ただ、それでも「悪くない一日だった」と言って毎日を終えられる世界であって欲しい。私は、そのことをいつも願っている。だから、元の「神様」が好きだ。